

だれかを たすけたい

八雲中学校 三年 亀田 日向歩

「逃げないで。」この言葉を理不尽な言葉だと思っていた。ちゃんと分かっているくないせに、物事の重大さや重さを知らないくせに、どれだけ辛いかわからないくせに。軽くそういう言葉を言うのは無責任だと思っからだ。誰だって逃げたいことはある。閉じこもったり、周りと関わりたくなかったりすることだってある。それこそ、接したり関わったりすることを恐ろしいと感じることだってある。この本は、そんな心の拠り所を「孤城」として表した物語である。

この話の主人公は学校での居場所をなくし、閉じこもっていた中学一年生のところ。学校に行かずに部屋でテレビを見ていると、目の前で突然鏡が光り始めた。鏡に触れると吸い込まれ、城のような建物、孤城へと行くことができた。そこには、このころのように学校に行っていない七人の子供達が集められていて、一年間一緒に過ごしていき、願いが叶う「願いの部屋」を探すという話だ。

まず初めにこの話を読んで思ったことがある。それは、今学校に行けていない人達には一人一人違う理由があつて、私達が思っているよりも苦しんでいる、ということ。とても

当たり前のことだが、生きている全ての人が違っていて、思うこと、感じるものが全て違う。ころ、アキ、フウカ、マサムネ、ウレシノ、スバル、リオン。全員学年も、歳も、性別も、学校に行けていない訳も、違う。だから、学校に行けていない人、世間では、「不登校」と呼ばれる人達をそんな言葉で表して一括りにまとめてはいけないと思った。

私は去年くらいから、用事などがあつて忙しかったことから周りとギスギスしたことがあつた。もしかすると、これも言い訳なのかもしれない。私はもともと人付き合いが悪く、人と関わるのが苦手だつた。そして、一度仲間外れに合つた。それからというものの、誘ってもらつても断つたり、朝に会つても挨拶一言もせず、関わるのが嫌になり、怖くなくなつてしまつた。一切の関わりを絶ちたくて、学校にも行きたくなくなつた。それでも、休むことはできない。弱いと思われたくないし、気づかれたくないから。何度も何度も同じことを聞いてくる先生にも嫌気がさして本当のことを言えず、ママ友を介して情報収集をし、その度にガミガミと言ってくる母にもいら立ちを覚え、ますます話しづらくなり、今まで本当のことを言えずに過ごしてきた。何かを言われる度に自分を責めた。とにかく目立た

ないように、誰の気分も損ねないように、ただただひたすらに孤城に、願いの部屋にもって静かに大人しく過ごそうと思つた。その傍らで、誰かが孤城をこじ開けて願いの部屋を探して、外へ連れ出してくれることを期待していた。私はずっと周りに求めてばかりだつた。自分からアクションを起こすこともなく、何かをしてほしいと願いの部屋に閉じこもっているだけだつた。周りとの関わりを絶ちたいくせに、求めているという矛盾が嫌でたまらなかつた。そんな自分が嫌いだつた。でも、ころが必死に「逃げないで」と言つてアキを助けた時、私の中で何かが弾け、私まで願いの部屋から引つ張り出されるような気分になつた。その時やつと「逃げないで」の本当の意味が分かつた。ころに「一緒に頑張ろう」と言われた気がした。そして、孤城から出て自分の殻を破つて、外の世界を見る。周りの人、いや、友達や仲間を大切にしたいと、たくさんの人と接したり話してみたいと思つた。

あなたを、たすけたい。この言葉は、作者がこの物語に込めた思いだ。実際に私はこの本に出会つたことで助けられた、救われた。だから、今度は私が誰かを助けたいと思つた。孤城は誰の心の中にもある。閉じこもつてい

る人がいたら、こころのように「逃げないで」と言っ引張出して「あなただけじゃない」って言っあげたい。あなたはどうか。閉じこもっていませんか。周りに、助けを欲している人はいませんか。

必死に話を聞こうとしてくれた先生、友達、お母さん。どうもありがとうございます。私も、自分ではない「だれか」を助けられるように、力強く精一杯生きていきます。ころのように。

誰かと私

梶中学校 三年 橋本 彩奈

「誰かの背中をそっと押せる人」「他を思いやる優しい心」の持ち主は、物語の中だけに存在するものではありませんでした。私の身近にも、ダンやレイラのような人がいることに、この本を読んで気がつきました。

この本は、サミという難民の少年が主人公です。サミとサミのじじの宝である楽器「ルバーブ」が何者かに盗まれ、質屋に売られてしまいます。サミはルバーブを買い戻すため、じじには秘密で十一回もの取引を行い、お金を貯めるのです。

サミのために友達のダンやレイラ達がパソコンのオークションを開く場面で、学校の先生やサミの知人など、大勢の人々がサミのために集まっていました。もしサミが一人だったら、この取引は出来なかったと思います。サミは仲間がいたからこそ、取引を行うことが出来たのです。

サミは多くの優しい人々に支えられていることを、私は羨ましく感じました。サミのことを羨ましく思っていました。私の周りにも多くの優しい人たちがいることに気がつきました。

私は運動が苦手で、体力ありません。そ

のため、体育のマラソンではいつもビリになつてしまいます。そんな時、クラスの仲間たちはいつも私を励まし、応援してくれます。私はその優しさにいつも勇気をもらい、苦手なマラソンも完走することが出来ました。運動の苦手な私を応援してくれる友達や、勉強でわからないことを質問すると丁寧に教えてくださる先生方、そしていつも寄り添ってくれる家族。私もサミと同じで、周りの人々の優しさに支えられています。ダンたちのように、人を思いやれる優しい心を持つ人は、身近にもいたのです。

爆撃で両親を亡くした時のことを思い出して苦しむサミにじじが優しく語りかける場面が心に響きました。サミはこの辛い過去を人に話しません。もし私がサミだったら、辛い過去を人に話して楽になりたいと思います。しかしサミは、人に話すことの方が辛いと感じているのです。だから、この過去の出来事は爆撃で生き残ったサミとじじしか知らないのです。

この場面でサミはじじに「生き残りたくなかなかつたよ!」と言います。それに対してじじは、「そうだな。わしにもわかるよ」と言い、「わしらが失った者をほかの者で補うことはできません。だが、これからもたくさんの出

会いがある」と優しく語りかけました。

たしかに、失った人を他の人で補うことはできません。しかし、生きていれば多くの出会いが待っているというのです。じじは、サミに生きているからこそその希望を教え、これからの人生を楽しく、強く生きてほしいと願っているように思います。

私は小学生の時に、とても仲の良い友達がいきました。しかし、その友達が転校してしまつたことで今では会うこともなくなりました。その時は辛い思いをしましたが、生きていたからこそ大切な友達を得ることもできました。生きなければ別れはありませんが、出会いもあります。サミも生き続けたからこそそそ良き友達に出会うことができたのだと思います。

人との出会いの大切さの他にも感じたことがあります。それは、「真の平和は人の心の中にある」ということです。私にとって「平和」とは、仲間や家族と一緒にいることです。人それぞれ「平和」だと感じるときは違います。しかし、一人一人が自分にとっての「平和」を願い、実現しようとしたときに初めて、「真の平和」は生まれると思います。

今の日本には戦争がありません。しかし、日本は本当に平和なのでしょうか。心ない言葉で多くの人が傷つき、いわれのない差別に

苦しみ、命を落とす人もいます。それに比べ、サミたちはどうでしょうか。自分の利益にはならないことを率先して行うダン、サミに寄り添い、励ましを送るレイラ。彼らの周りには笑顔が溢れています。「他を思いやる気持ち」これが笑顔の源であり、平和への第一歩だと思います。皆が自分の利益ばかり考えていては、いつまでも「真の平和」は生まれないと、今までに感じたことのないほど、強く強く思いました。

ルバーブの音色は、「青い鳥」のように、「平和」を願っていつまでも響いているのです。